八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起　上

宮　次　男

本稿でとりあげる八幡縁起絵巻のほかに、八幡縁起と称されているものに、「宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起」と「宇佐大神宮縁起」とも呼ばれる「宇佐八幡宮縁起」がある。

「宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起」[2]は、承和十一年（八四四）成立の漢文縁起で、その内容は八幡神の始現から各地遷座の諸説、放生会の初催、弥勒寺の起源などをのべたものである。

「宇佐八幡宮縁起」[3]二巻も漢文で建武二年（一三三五）の書写になり、その内容は、次の通りになる。

上巻　帝位御事、崩御事、初顕神道坐事、豊前国宇佐郡本宮事、御社初事、小山田社部、放生会事、小倉山宮事、造弥勒寺事、勅使参宮始事、第二御殿事、長御験御枕事、本迹御体如在事、同寺移来造立事、東大寺成就菩薩神力事、大菩薩御受戒師度者事、弥勒寺領事、東大寺供養時大菩薩御上洛事、御神領事

下巻　小倉山帰坐事、御修正事、弥勒寺御入堂事、弘法大師参宮法楽時御受法事、伝教大師参宮講経時以神衣被進事、第三御殿之事、第十七代仁徳天皇御霊事、神領可全事、被加年分僧二人事、八幡大菩薩御行法事、若宮四所権現事、西脇殿事、東脇殿之事、北辰殿事、左善神王事、右善神王事、八子神事、御許山石

一

世に八幡縁起と呼称されている絵巻は多数遺存している。それらは、神功皇后の三韓遠征と、その御子応神天皇が八幡大菩薩として現われ、八幡神として祠られる経緯を描いたものである。その中で、最も古い遺品と考えられるサンフランシスコ・アジア美術館蔵の八幡縁起絵巻について、かつて一文を草したことがあるが[1]、その際、八幡縁起絵巻全般について多少ふれる所があり、八幡縁起は大きく二系統に分類できることに論及した。その後、当該絵巻遺品の調査を進め、資料の追加と若干の知見を得るにいたったので、前稿の欠を補うと共に、現存の八幡縁起諸本の分析と、それによって得られた伝写系統の類別、および両者の関係など八幡縁起絵巻がかかえている問題を解明したいと思う。

註

（1）『新修日本絵巻物全集』別巻2解説（昭和五六年二月）

二

体権現事、武内霊神事、白山権現事、当山三鉢霊水事、

これらの内容は八幡神の神託と神威を主として述べたもので、絵を伴うものではない。

絵をともなったものとしては、石清水八幡宮の「伝法院絵」[4]と称するものがあり、その銘が伝えられている。これも漢文であるが、その内容を目録によって示すと、次のようになる。

一隼人征伐事、二託宣放生事、三因位縁起、四皇后得宝珠事、五新羅征伐事、六宇佐宮銘上、七宇佐宮銘中、八宇佐宮銘下、九山崎離宮銘、十王城之銘、十一当山之銘

表紙の端書によると、絵は文明十五年（一四八三）に続き加えたもので、もとは別に図絵一巻あったものを縮写したようにみられるが、絵は「八幡大菩薩因位縁起」と「神功皇后新羅征伐」に付いている。しかし、全体の構成をはじめ、絵の内容などはここでのべる縁起絵巻とは大いに異るものである。

このほか、『考古画譜』に引かれている「宇佐八幡宮絵詞」というのがあり、これは『改定史籍集覧』十二に収載する「和気清麿参宇佐宮絵詞」を指したもので、奥書によると、昔後白河院の蓮華王院宝蔵に納められたもので、その詞書を宝治年中（一二四七―四九）に書写したものであることがわかる。その内容は和気清麻呂の物語に終始し、八幡宮縁起とは名づけられない。

以上、八幡縁起と称されている文献をあげたが、いずれも現在流布する縁起絵巻とは直接的な関係があるとは思われないものである。

註

（2）『大日本古文書』家わけ第四「石清水文書之二」
（3）『続々群書類従』第一神祇部
（4）『大日本古文書』家わけ第四「石清水文書之五」〔宮寺縁事抄第十〕

三

「八幡縁起」として現在流布している絵巻は数多いが、その詞章と絵の表現を相互に比較検討するとおよそ二種類に分類することができる。その分類によって、中世制作の現存作品をあげると次の通りである。

甲類　「八幡大菩薩御縁起」と内題が銘記されるもの。

サンフランシスコ・アジア美術館蔵一巻　康応元年（一三八九）奥書
和歌山　鞆淵八幡神社蔵一巻。
大阪　逸翁美術館蔵二巻。
赤木文庫旧蔵衣奈八幡宮縁起二巻　応永九年（一四〇二）奥書。
国文学研究資料館蔵一巻　文正元年（一四六六）奥書。
兵庫　浜天神社旧蔵一巻　大永七年（一五二七）奥書。
奈良　天理図書館蔵二巻　享禄四年（一五三一）奥書。
大分　八幡奈多宮蔵二巻　永禄三年（一五六〇）奥書。

乙類　内題はなく八幡宮縁起と称されるもの。

京都　石清水八幡宮旧蔵二巻　永享五年（一四三三）奥書　但し昭和二二年焼失。
大阪　誉田八幡宮蔵神功皇后縁起二巻　永享五年奥書。
奈良　東大寺蔵二巻　天文四年（一五三五）奥書「絵師　宗軒　詞　寺務公順」とあり。
大分　柞原八幡宮蔵由原八幡宮縁起二巻「絵　藤原光茂　詞　二品（尊朝）親王」と奥書あり。

このほか、八幡縁起に類するものとして、掛幅ではあるが、

福岡　玉垂宮蔵玉垂宮縁起二幅　建徳元年（一三七〇）箱書

があり、また応神天皇の崩御から御陵築造、八幡神の霊験を描いた

大阪　誉田八幡宮蔵誉田宗廟縁起二巻　永享五年（一四三三）奥書。

東京国立博物館蔵八幡縁起残欠一巻。

が伝えられている。しかし、これらについては本稿では言及しない。

以上が世に八幡縁起と呼ばれている作品であるが、本稿でとりあげる「八幡大菩薩御縁起」といい、「八幡宮縁起」といい、その内容は神功皇后の三韓出兵と、御子応神天皇が崩御の後、神として垂迹され、各地に勧請されたという大筋で一致する。そこで次に、この絵巻を構成する絵の主題を順を追って示すことにする。

(1)仲哀天皇、新羅国から襲来した塵輪という怪物を射殺し、天皇も流れ矢に当って崩御。

(2)神功皇后、遺勅により三韓に出発、途中住吉明神、老翁の姿で出現し遠征に参加する。

(3)住吉明神、牛を海中に投げ込む。（牛窓伝説）

(4)住吉明神、浅瀬の船を沖に押し出す。

(5)住吉明神、岩を射貫く。

(6)住吉明神、せいのうの舞を舞って磯童を海底から召しよせる。

(7)神功皇后、磯童が竜宮から持参した旱満二珠を使用して新羅軍を全滅にする。

(8)神功皇后、新羅王の前で岩に戦勝の碑文を書く。

(9)神功皇后凱旋し、筑前国で鵜羽根葺の産屋で応神天皇を出産する。

(10)応神天皇崩御、箱崎に戒定慧の箱を埋めてしるしの松を植える。赤幡四旒、白幡四旒が天から降る。

(11)応神天皇の御霊、宇佐の馬城峯に石躰権現となって垂迹、石より金色を放ち、仁徳天皇が勅使を派遣すると金色の鷹となって現れる。

(12)宇佐の蓮台寺山に鍛冶の翁となって現れ、大神比義の祈請に応じて、三歳の小児になって竹葉の上に現われ、我は誉田天皇なりと名のる。

(13)和気清麻呂、称徳天皇の怒りを得て両足を切られ、鹿（猪）に乗って宇佐八幡宮に参詣する。

(14)行教和尚により、石清水に勧請される。

(15)箱崎八幡創建。

(16)東大寺に勧請。

(17)柞原に勧請。

このうち、(16)、(17)は当該八幡宮縁起にのみみられるところである。

以上が大筋であるが、甲類系の「八幡大菩薩御縁起」と乙類系の「八幡宮縁起」では、各段の構成と詞章内容及び絵画表現に共通の相違がみられる。そこで次にそれらの点を指摘することにする。

四

先ず、段の構成を絵を中心にしてのべる。

甲類本では、第一段が神功皇后の筑紫への出発と住吉明神の出現の図で始まるが、仲哀天皇の塵輪射殺は詞章ではふれていないので当然描かれていない。しかし、乙類では(1)仲哀天皇の塵輪射殺は詞章でも重要視されており、この場面から図様ははじまり、ついで(2)神功皇后の出陣と住吉明神の出現につながっている。但し、東大寺本と由原本は、塵輪射殺と皇后出陣は段が別かれている。

(3)の牛窓伝説は両本とも単独に描かれているが、甲類本では牛が海を泳いで船に向って来る有様であり、乙類本は老翁が牛を海中に仰むけに投げ出した図様となっている。

(4)住吉明神浅瀬の船を沖に押し出す場面と(5)住吉明神岩を射貫く場面は両本とも詞章にはのべているものの、甲類本では(4)の場面は描かれておらず、(5)のみである。これに対し、乙類本はこの両図を一段の中に連続描写している。

(6)せいのう舞に磯童出現する場面は、甲類本ではこの図で一段を構成するが、乙類本では東大寺本と由原本が次の(7)旱満二珠により新羅軍を殲滅する場面に連続する。なお、誉田本と石清水本はそれぞれ一段で構成している。

更に、甲類本では、この(7)は、(8)神功皇后岩に戦勝の碑文を書く場面に連続するが、天理本、奈多宮本、逸翁本は、(8)が独立場面となり、乙類本も同様である。

(9)鵜羽根葺の産屋で応神天皇出産の段は、甲、乙両本とも独立場面をとっているが、アジア美術館本のみ、この段の詞書につづいて、海岸に建つ神社の景観を描き、その次の段に他本にない飯岡山垂迹をのべた詞書があって、それに続いて鵜羽根葺の産屋場面が描かれている。これはこの本の原本にすでに錯簡が生じていたのではないかと思われる。

(10)箱崎のしるしの松に八幡ふる場面と、(11)石躰権現として垂迹、金鷹となって現れる場面は甲、乙両本とも同一段に連続描写されるが、ただ、乙類本の東大寺本と由原本はこの両場面はそれぞれ別の段になっていて、東大寺本と由原本の(11)の場面は、次の(12)鍛冶の翁として、さらに三歳の童子として現れる場面に続いている。しかし、他本はいずれも(12)の絵は単独場面である。

(13)和気清麻呂宇佐参詣の段は、いずれの本にもあるが、ただ誉田本にはない。

(14)行教の石清水勧請の段は、東大寺本と由原本にはなく、その代り、これらの本は所蔵寺院に対応してそれぞれ、(16)東大寺勧請の段、(17)柞原勧請の段がある。また、この両段は他本には当然存在していない。

(15)箱崎八幡創建の段は、甲類本はいずれも詞書はあるが、絵のついているのはわずかに奈多宮本だけである。ただし、アジア美術館本の(9)の詞書につづく海岸の神社は、あるいは箱崎八幡宮の景観とみなすことができるかもしれない。なお、乙類本では、この段は詞、絵ともにない。

以上、甲、乙両本について、各々共通する同異をあげたが、さらに、甲、乙両本とも、段の構成上、それぞれが二分されることが指摘できた。すなわち、甲類本では、天理、奈多宮、逸翁の三本と他本、乙類本では、誉田本、石清水本と東大寺本、由原本に再分類されるのである。

五

詞章について両本を比較すると、同類の本ではいずれも誤写、脱字はあっても、ほぼ同文の詞章であるといえる。しかし、両本間ではかなりの内容的な相違もあり、またそれが画面にも反映している。以下、それらの相違を指摘しよう。

巻頭の書き出しは、両本とも「夫我朝秋津嶋豊葦原中津国者天神七代地神五代已上十二代ハ皆神御代……」とのべて、ほぼ同文である。しか

し、

(1)仲哀天皇塵輪射殺の段（図版Ⅱ）は大いに異る。

前記したように、この説話は乙類本の巻頭にのべられるものである。すなわち、仲哀天皇二年に新羅より数万の軍勢が来襲し、天皇自ら官軍をひきいて長門国豊浦宮でこれを迎撃した。その時、頭が八つある塵輪という赤鬼が黒雲に乗って攻めてきたが、天皇がこれを弓で射殺した。しかし、天皇も流れ矢に当って危くなられたので、神功皇后に自分が万一の時には大将軍となって異国を討つべきこと、また、皇后の胎内に宿る御子は皇子であり、誕生の後は皇位につけるべきことを詔して、同九年二月六日に筑紫の橿日宮で崩御になった。というのである。

これに対し、甲類本（アジア美術館本、以下同じ）は、

仲哀天皇御宇二年癸酉新羅国ヨリ夷敵ノ軍兵競来リ本朝ヲ討取ントス、天皇議勅シテノ給ハク、皇后宮懐姙ノ王子、若為二男子一可レ成二龍王聟一、若為二女子一可レ与二竜王ノ后一云々、而仲哀天皇九年庚辰二月六日、於二筑紫橿日宮一、程ナク崩御畢

和歌山　鞆淵八幡神社蔵

挿図1　神功皇后の出陣

とあるのみで、塵輪についての話しはない。ただ、神功皇后の懐妊中の児が男子ならば龍王の聟とし、女子ならば龍王の妃にすべしというところは、乙類本になく、これらは両本の基本的な相違を示すものである。

(2)神功皇后の出陣と住吉明神の出現（挿図1）

(1)の詞章につづいて両本とも、神功皇后が異国征伐のため都を出発する際、白髪の老翁（実は住吉明神）が出現してお供を願い出る。皇后は、老人であるためおぼつかなく思われたが、これをゆるして同行させたことをのべる。しかし、甲類本では、

羅勢門ヲ出サセ給フトテ、祈請セラレケルハ、願ハ天道我ニカヲ副テ彼異国ノ敵滅シテ我国ヲ安穏ナラシメ給ヘト申シ給シカバ、何ヨリトモナク白髪ノ老翁一人出来リ

と、乙類本にない出現の場所と、皇后の祈請によって出現したことを明らかにしている。

これらの詞章に対する絵についてのべよう。

先ず乙類本では、当然ながら塵輪射殺の場面が描かれるわけである。しかし、現存の誉田本、東大寺本、由原本では図様に相違がみられる。すなわち、誉田本は御所の外門で主を待つ牛車の場面からはじまり、中門、清涼殿、紫宸殿とみなされる殿舎がつづき、紫宸殿では、矢を射る仲哀天皇の姿が垣間見られ、さらに紫宸殿前の宮門をはさんで武者がたむろし、最後に塵輪が黒雲の中であばれ、その首が落下する光景となる。そこで画面は一転して、山容をへだてて、神功皇后の鳳輦を守護してこれにつづく騎馬武者の行列と、鳳輦の行手に出現する白い狩衣姿の

a　鞆淵八幡神社蔵

b　柞原八幡宮蔵

挿図2　牛窓伝説

住吉明神が示される。

東大寺本では先ず紫宸殿の中央で弓をかまえる天皇を正面からとらえ、廂に列座する公卿の光景が展開する。つづいて宮門の前でたむろする武者、さらに塵輪の首が落下する場面に連続し、次に詞書をはさんで、宮門を出発する皇后の鳳輦と警護の武者、さらに道服姿の住吉明神の出現場面が示される。

これに対し、由原本では、最初に黒雲中の塵輪が首を射落される場面が示され、ついで宮門、紫宸殿の場面へとつづき、あたかも東大寺本の構図を裏かえした様相を呈している。つぎに神功皇后の出発場面には、東大寺本に見た宮門はなく、路上の鳳輦の行列が示されていて、この場に出現する住吉明神は白の狩衣姿で、その点は誉田本に一致する。

次に甲類本では神功皇后の出発場面から始まるわけであるが、いずれも宮門から出発するもので、住吉明神も道服姿であり、構図の上では東大寺本がこれに近いといえるものである。

(3)住吉明神、牛を海中に投げ込む。(牛窓伝説)(挿図2a・b)

備前の泊りについた時、長さ十丈ばかりの大牛が沖の方から現れ来て、皇后の乗船を襲いかかった。その時、彼の老翁は牛の角を取って海中に投げ入れた。すると、この牛は海中で島となり、今にいたるも存在しているという。この所を「牛窓」といい、文字には「牛まろばし」と書く。この時より皇后はこの老翁をたのもしく思われた。

絵は甲類本では、牛が海上を突進して船に向ってくるのを、舳先に立ってむかえるかまえをとる老翁を示すが、乙類本では、老翁がすでに牛を海に投げ出して、牛が海上に仰むけに転倒している光景で示されている。

(4)住吉明神　浅瀬から船を押し出す(図版Ⅲ)。

門司の関のほとり、大江が島という所に着いた時、海水が干あがって船が動けなくなった。その時老翁はただ一人、浅瀬に入って船を沖の方に押し出した。

甲類本はこの段の絵は描かれていないが、乙類本は、詞章通り、大船を老翁が沖に押し出す光景が示されている。

(5)住吉明神、岩を射ぬく(挿図3)。

(4)の詞章につづいて、異国に渡る途中、芦屋の津に着いた時、老翁が岩を弓で射ぬいたのを皇后がご覧になり、いよいよ心づよく思われた。

絵は両本とも大きな岩を射貫く老翁を描くが、甲類本は陸上の岩であり、乙類本は海中の岩となっている。また、乙類本では、(4)の光景につ

づいてこの(5)の場面が連続し、一段中二場面を形成している。しかし、甲類本の奈多宮本では老翁の背後の海に船が描いてあり、乙類本に一歩近づいている。

なお、詞章では、甲類本は(4)と(5)の間で、豊前国舟木山の木を切って、宇佐で船四十八艘を造り、鹿嶋で乗船、軍兵は千三百七十五人で、大将軍には住吉と高良の両大臣、梶取りは鹿嶋大明神である。とのべているが、乙類本のこの段ではこれについては記していない。

(6)せいのう舞にさそわれて磯童が出現する(図版Ⅳ・挿図4a、b)。

その後、香椎という浜に停泊した時、皇后は老翁に、異国に攻め渡って、敵どもをいかにして打ちしたがうべきかと相談された。翁は是より西に鹿の浜（乙類本は島とする）という所があり、そこの島に安曇の磯童と申す者がおります。その童を召して竜宮城に遣わし、旱珠、満珠という二つの玉を借りてくれれば、彼の国をたやすく打ちしたがえることができます、と申上げた。皇后は、では如何にしてその童を召し出すかと問う。翁は、この童はせいのうという舞を愛しますので、その舞を舞って召しよせますといって、海中に舞台を造り、そこで翁がその舞を舞った。その舞台は石になって、今も残っている。

挿図3　岩を射抜く住吉明神　　鞆淵八幡神社蔵

絵は海中に造られた舞台で翁が舞いを舞い、そこえ磯童が出現する光景を描くが、甲類本では舞台のそばに竜頭の舟に乗った唐装の磯童が木の枝の先に二つの玉をつけたものをさし出すようにして現れるところが示されている。これに対し、乙類本では亀の上に乗って、頸に皷をかけ、顔に浄衣の袖といった布を掩っておどりながら出現するという光景で示されている。これは、乙類本の詞によると、この童は海中に長くいたので、顔にかきびしなどがびっしり取り付いて見苦しいので、このように顔面を掩ったのである。

また、この段の絵で、甲類本の天理本と逸翁本の磯童出現の図様が他と異っている。すなわち、ここには二人の人物が登場しているのであって、一人は竜頭の舟に笏をかまえて乗る唐装の女性、他は海中から半身を出し、二珠を乗せた盆を前方に捧げてこれに随う唐装の童形（?）である。このうち、二珠を捧持するのは磯童とみなされるが、舟に乗った持笏の人物は何者であろうか。いま一度、甲、乙両本のこの段の詞章を検討することにする。なお、甲類本では、この磯童出現の段は次段(7)の冒頭にのべられており、乙類本では誉田本と石清水本とを除き、次段(7)とこの段(6)が合体しているので問題はないが、誉田本と石清水本では二分され、(7)の冒頭に龍宮からの帰還がのべてある。

甲類本

其時アムトム（安曇）ノ磯童此舞ヲ愛セムトテ船ニ乗テ舞台近ク出来レリ、皇后老人ニ仰有ケルハ、件玉ノ事彼童ニ申ベキヨシ被仰ケレバ、老人童ニ申テ云ク、汝チ不レ知哉日本国王為ニ御本意ヲ遂ガ一新羅、百済ヘ渡セ給フ、日本ノ内ニ乍レ居国王ノ仰ヲバイカデカ可レ奉レ背、早ク御力ト成テ彼国ノ物ドモヲ打随テマイラセヨト申シ給ケレバ、此童イカニモ宣旨ヲバ不レ可レ奉レ背ト申テ、即竜宮城ニ行テ、竜王ニ件ノ由ヲ申テ此玉ヲ奉テニ借得ヘ一、次日早旦ニ還テ皇后ノ御前ヘ持参ッカ

マツリケリ、其時皇后御感ナノメナラズ。

乙類本（誉田本、以下同じ）

件磯童この舞を愛して、即舞のすがたになり、浄衣にたびはゞきして頸に皷をかけたり、海中に久しくすみたるゆへに、かきびしなんど云物顔にひしと取付て、あまりにみぐるしかりければ、浄衣の袖をときて顔におほひたれて、亀の甲にのりて舞台ちかく出来る、さてこそ此舞には今の世までも布を面にたれ侍りけれ、彼舞台は海中に石と成て今に侍りとなむ、さて皇后老翁に仰られけるは、件玉の事、彼童に仰合べしとの給ば、翁申さく、磯童は海中の案内者にて供奉者侍べし、御使の人をさだめらるべしと申ければ、其も老人はかるい申べしと勅定ありけるに、さらば皇后の御妹豊姫を御使として件玉をめさるべしとて、翁勅定の趣磯童に仰合けるは、汝しらずや日本のあるじ神宮皇后先皇御本意を遂んがために新羅、百済等を攻したがへんとし給ふ、日本国にありながら王命をばいかでか背奉るべき、早宣旨に随て忠節をいたすべし、就中竜宮に二の玉あり、彼玉を借て人力を費さずして異国を征罰すべし、豊姫に相具し奉て竜宮におもむきて勅宣の旨を竜王に申べし、とありしかば、件の磯童豊姫を具し奉て竜宮におもむきたり（以上(6)）。

磯童豊姫を具し奉て竜宮に行向て（誉田本・石清水本にあり）干珠満珠二の玉を借得て次日早旦に帰り参けり、皇后なのめならず御感あり。

以上、甲、乙両本の詞章を併記したが、各本の絵はそれぞれ詞章の記述を忠実に絵画化していることは明かである。しかし、甲類本の磯童は、老翁の命を受けて竜宮から二珠を借り受けて出現する姿であり、乙類本は、せいのう舞にさそわれて出現した姿となっている。そこで、甲類本系ではあるが天理本と逸翁本の磯童の図様はどうかというと、時間的には他の甲類本と同じ竜宮からの帰還ということになるが、ただ竜頭の舟に乗る女性が問題で、この人物について甲類本の詞章は何もふれていない。しかし、乙類本によると、この女性は竜宮に使者にたった豊姫であることを示唆するのである。そこで、これらの事を考えると、天理本、逸翁本のこの段の絵は乙類本の詞章にみる豊姫竜宮行の説話が、甲類本の詞章の範囲を越えて取り入れられていることになる。それゆえ、逸翁本と天理本は甲、乙の二系統の絵巻をつなぐものとして重視されるのである。

a　鞆淵八幡神社蔵

b　柞原八幡宮蔵

c　天理図書館蔵

挿図4　磯童の出現

(7)早満二珠により新羅軍を破る(図版V・挿図5)。

甲類本は前述したように、この段の詞章は冒頭に前段の絵に関する磯童の竜宮行について述べ、ついで、皇后がしばらく対馬国に立ち寄られた時、すでに皇子を懐妊しておられたので、そこにあった白い方形の石で御腹を冷して、もし胎内の太子が日本の主となるならば、いま一月生まれるべからず、この石をわが体と思え、と腹の中にいる皇子に申された。そして、皇后は忽ちに男の姿となって百済国に渡った。味方の船四十八艘、軍兵一千三百七十五人、これに対して異国の兵船十万八千艘、軍兵四十九万六千余人である。異国の国王大臣らは、日本は賢い国である。女人を大将軍とするとは何事かと、嘲哢して雲霞の如き大軍で攻め寄せてきた。そこで旱珠を海中に入れると、大海は忽ち海水が引いて陸地になり、敵の大軍は徒歩で沖の方まで攻めてきた。その時、旱珠を海からひきあげ、満珠を海に入れると、忽ち大浪がおこり、海は元のようになったので、敵兵は悉く海水にのまれて一人も残らず死んでしまった。皇后は大勢の死人が出たことを歎かれると二人の竜王が海中から出現して、それらの死人を一人も残さず食べてしまった。この殺生を歎く思し召しにより、放生会を行うことになったのである。とのべている。

挿図5　旱満二珠により新羅軍を破る　大分　柞原八幡宮蔵

これに対し、乙類本では、磯童の竜宮行につづいて、軍船の建造についてふれ、三百人の化人が出現して長門国の木山の材木を切り出し、豊前国宇佐郡で四十八日のうちに四十八艘の船を造ったことをのべる。さらに、

是すなわち八幡大菩薩は、本地阿弥陀如来にてましませば、六八超世の悲願を表し給なるべし。彼老翁は住吉大明神にてまします。此御神と申は地神第五の終鸕鷀草葺不合尊の御事也。神武天皇より以来日本の百王悉彼の御苗裔なり。我国守護のめぐみ深によりて、人倫の形を現じて、皇后に付奉り、異国を攻随給こそ目出けれ。又磯童と申は筑前国鹿の嶋の明神の御事也。常陸国にては鹿嶋の大明神、大和国にては春日大明神、皆是一体分身同体異名にてまします。其外諏訪勢田三島高良以下の神達三百七十五人四十八艘の船に同姿にて現じ給ふ。惣じて其勢一千三百七十五人四十八艘の船に乗つれて、筑前国鹿の嶋より漕出す。大将軍には住吉大明神、副将軍には高良大明神也

と、老翁と磯童の本体を明らかにし、神々の守護についてのべる。さらに、皇后の男子変成について、

皇后も忽に男子の姿となり給。御長九尺二寸、御歯は一寸五分、光あり、みどりの御ぐしびんづらにとり、からわにわけて御冑をめし、御手には多羅樹の真弓八目のかぶら矢をとりそへ給ふ。弓を御たらしと云事は此多羅樹よりはじまれりとなむ。御腰に太刀をはき、御足に藁沓をめす。紅の御裳の上には唐綾おどしの鎧をたてまつる。御うみかつきの事なれば、御乳房の大にして、御鎧の引合あはざりければ、高良大明神草ずりをきりて御脇の下につけ給ふ。今世に脇楯と云は是より初まれる。

と、その形相を詳細に記述し、ついで、

かゝりけるところに、皇后御産の気出きたる。御腹しきりになやましく思食ければ対馬国にて御船より下、白石に御腹をひやしつゝ、御腹に石をはさみ給。我はらみ奉る所の御子日本の主となり給はゞ、今一月胎内を出給べからずとねぎことし給て、又船にめされけり。

と、対馬で下船された理由を明らかにしている。

豊前国宇佐にて造船したことについては、甲類本でも第三段の(4)と(5)の間でのべており、その際、住吉、高良の両大臣が大将軍となり、鹿嶋大明神が梶取になったことにふれているが、老翁が住吉明神の化身であり、磯童が鹿島明神であるという垂迹の本体は明かしていない。また、神功皇后の対馬下船の理由についても甲類本では「干時皇后蹔津嶋ノ国ニ立依給フ」とあるだけで、何らふれるところはない。

次に、旱珠、満珠を用いて敵を全滅させるところでは、乙類本ではこの二珠を操ったのは高良大明神であるとし、また、日本の船は竜神の加護によって、旱珠の場合も水が干ることがなかったと説明を加えている。しかし、甲類本にみられる竜王が現れて敵の死者を悉く食べた事や、放生会については何もふれていない。

絵についてのべると、甲類本では二艘の日本軍船の攻撃からはじまり、一艘の軍船の舳先に珠を捧持する甲冑姿がみられる。ついで二頭の竜が海中の敵兵を食い、干あがった海で敵船が立往生し、防戦する敵兵。さらに、それと陸続きになっている新羅の王宮の前で、新羅王の目前で巨石に弓の末弭で碑文を書く甲冑姿の神功皇后が連続描写されている。このうち、神功皇后が岩に碑文を書く場面は、この段の詞章にみられない所で、甲類本では次段の前半にのべられている。

以上、甲類本のこの段の絵は、旱、満二珠の場面が詞章とは順序が逆であり、海底が陸地に続くという不合理さがあり、さらに次段の詞内容を先どりして描くという、いささか無理な構成になっている。しかし、詞章が甲類本に属す逸翁本と天理本および奈多宮本では、この場面はいささか異っているのである。

すなわち、逸翁本は旱珠に続いて満珠の場面が示され、他の二本は満珠場面だけで、いずれも満珠場面では海中の敵兵を食う竜王が活躍し、敵船は殆んど無人で海上にただよう状態で示されている。そして、この三本は神功皇后の碑文を書く段はこの場面にはなく、次段で独立しているのである。

乙類本の絵はどうかというと、先述したように、東大寺本と由原本は、(6)せいのう舞により磯童が出現する場面の海につづいてこの海戦は描かれているわけで、その図様は、日本の軍船二艘が旱珠で干あがった海に居る敵兵を攻撃する場面から始まる。軍船上の櫓には狩衣姿の老翁が珠を捧持し、軍船の舳先にはそれぞれ竜頭と鷁首が付いていて注目される。竜頭鷁首を軍船に付けるという発想は奇抜で、これは甲類本にみる竜が船首に移行したのではないかと考えられる。

干あがった海に続いて、満珠により、海中で溺れる敵兵たちや、さらに小舟に分乗した日本の軍兵が敵船に攻め込む光景が展開し、この段の絵は終る。これらの光景は甲類本に比べて詞書内容が忠実に示されていることが指摘できるのである。

以上で乙類本は上巻が終るのである。（以下次号）